

LSC NEWS LETTER

Learning Support Center 広島修道大学
学習支援センター

2023 No.37

広島修道大学
Hiroshima Shudo University

Contents

特集 修道スタンダード「修大基礎講座」を振り返る 亀崎澄夫 初代センター長に聞く…1 修大基礎講座の変遷…3 関係教職員の声…4
学生による学生のための数学ピア! …5 第76回 LSC ドキュメンタリー・アワー開催報告・大学教育学会 第45回大会参加報告…6
新任学習アドバイザー 挨拶・LSC 資料紹介…7 <学び★サプリ>効果的な単語学習・退職のご挨拶…8

特集

修道スタンダード 「修大基礎講座」を振り返る

亀崎澄夫 初代センター長に聞く

『LSC NEWS LETTER』No.35でも取り上げたように、本年度をもって学習支援センターがコーディネートを担当してきた修大基礎講座が終了する。2011年度から始まった修大基礎講座は、2007年度に開講したファーストイヤー・セミナー I（以下、FYS I と表記）の後継科目である。修大基礎講座を特集するにあたり、2005年度の学習支援センター設立時および2007年度の FYS I 開講時に学習支援センター長であった亀崎澄夫名誉教授に当時の話をうかがった。（聞き手：学習支援センター 松川、富永、安田）



初代センター長を引き受けた経緯

松川 2005年4月に学習支援センターを設置するという話は、誰からどのように出てきたのですか？

亀崎 設置それ自体の話は知らないのですが、2005年度入試の時、入試本部で当時の児玉学長と川内副学長から「こういうものをつくるようになったのだけど、引き受けてくれないか」という話がありました。モデルは金沢工業大学のセンターで、広島工業大学もやっていると。その時聞い

たイメージでは補習教育のセンターということでした。

松川 それで「はい、引き受けます」とすぐにおっしゃったのですか？

亀崎 私は教務部長を4年間、市川学長の時にやりました。私のイメージでは教務部は教育内容を担保する部局。ところが教務部がやっていることは学部間の調整、そして学部で決めたことを事務やコンピューターで支えること。そういうことしかやっていない。

私は全共闘世代で全共闘は大学解体なんかも言っていたのですが、その他にも大学教育の中身についても問題提起していた。私は和歌山大学の全共闘運動の中でゼミ改革運動のようなものをしていました。もっとも、自分が教える段になると、学生のときに批判的だった教育の仕方の改善などは忘れて、自分が学んだような授業をし、学生本位の教育ではない、一方的に知識を与えるという昔ながらの授業をしていました。しかし、教務部を担当したときに、大学教育の仕組みがどうあるべきかを考えると、やはり大学も変わらないとダメだし、学生の状況を見ていたら変わらざるを得ない。教務部の時に大学教育についていろんなことを言っただけダメだったので、そのリベンジみたいなかたちで「引き受けましょう」という感じだったと思います。

学生は自主的に来ない

亀崎 業務として決まっていたのは入学準備学習。その他は自由にやらせてもらえる感じだったので、学習支援をしている他大学を見に行った。最初にヒヤリングに行ったのが広島工業大学。センター長になる前に「行ってこい」と言われたので行くと、英語の先生の話ではとくに理系科目

以外では学生は自主的に来ないと。学習支援はやり方を考えないとうまくいかないし、とにかく学生に対しても教員に対しても、認知度を高めないとつぶれてしまう組織だと思いましたね。

ただ参考になったのは、教務部時代に大学教育学会でアメリカで行われている初年次教育の報告を聞いたことがあった。多少関心があったので「ああ、あるんだ」と、感じた。新しい部局をやることになり、海外でどんなことをやっているのか知っておいたほうが良いと何冊か買って読んだりした。そうすると1年次生に対してやっていることが全然違う。日本はどちらかといえば放ったらかし、自分でやりなさいと、支援する仕組みも整っていない。そういう支援する仕組みが必要じゃないかと。

もう一つ重要なのは、やはり授業と関わること。学生は自主的に来ないわけだから、何らかの形で授業の中に組み込む、授業と連携する。その連携の仕方はいろんな形があるので、修大基礎講座以外の仕方もありうるが、とにかく授業との関連を抜きにして学生に対して「あなたたちは基礎学力がないから来なさい」では無理だと感じました。

■ 学部・部局との連携

亀崎 当時、私の目標はふたつあったんです。一つは『ラーニング★ナビ』のようなかたちで「自分たちがやろうとしているのは、こういうことだ」と示すこと。もう一つは大学教育の基礎固めとして学生にラーニング・スキルを教えること。ちょうど修道スタンダード科目が発足する時だったので、自分たちの考えたFYS Iを新しいカリキュラムに入れるために動いた。

FYS Iの1年目は大失敗だった。部局授業と学部教員授業、教育効果を考えて交互にやった。部局が担当する授業は大教室で学科全体でやる、学部教員が担当する授業は小さなクラスに別れる。そうすると新入生はどこに行っていないかわからない。教員からも部局からもすごいクレームがあり大失敗。2年目からは、前半は部局担当、後半は学部教員担当としました。

松川 そうすると現在の修大基礎講座にもつながる、部局担当と学部教員担当を組み合わせた授業は、センター長だった亀崎先生から各学部にお問い合わせしたのですか？

亀崎 そうです。この組織はセンターだけでは何もできない。センターだけでやっても効果は少ない。ただ、人間環境学部の初年次授業案の作成などで連携できたこともあったが、学部との連携は概してうまくできなかった。

安田 FYS Iと修大基礎講座で大きく変わったことはありますか？

亀崎 修大基礎講座に変わったのは矢田部センター長の時ではないか。大きく変わったかといえば、あんまり変わってないんじゃないかな。

安田 FYS II*はどんな感じだったんですか？

亀崎 前期のFYS Iと後期のFYS II、両方を学習支援センターが面倒をみようとは最初は考えていた。しかしセンターの準備が間に合わずFYS IIは学部任せのしかなくなり、FYS Iだけを学習支援センターが担当することになったんです。

松川 2007年度のスタート時からFYS IIから手を引き、FYS Iだけを担当したということですか？

亀崎 実質的に最初からFYS IIには何もしなかった。

松川 連続させるつもりでFYS I、FYS IIと授業科目名をつけたけれど、できなかったと。

亀崎 はい。FYS Iが初年次教育の中核科目だとすると、それをとにかく担当したいというのがスタート時点での私の思いだった。

学部との連携は、例えば学科などからレポート作成用の資料提供を受け、アドバイザーが初年次教育用に授業案を作成し、授業デモンストレーションをして、学科教員にみてもらおう。やり方がわかったら、それを教員が自分たちで改訂していけば良いものができると思いますけど、それは教員にとって「授業をやらされる」感じで嫌なこと。それは私も気持ちとしてはわかるけど、良い授業を提供するためにはそういう方法もあるのではないかと今でも思っています。

安田 職員はどうして入ることになったのですか？ 学習支援センターが授業に関わるだけでも抵抗があったのに、部局職員も授業をするとすればすごい抵抗が先生方にあったのではないのでしょうか？

亀崎 教職協働の話ね。これは私の個人的な経験が大きいんです。FYS Iが始まる前も、各学部では1年次生向けの導入科目がありました。私はそこで必ずキャリアセンターの人にしゃべってもらって授業をやっていた。大学教育をちゃんと受けるには、大学の仕組みを知らないとうまく活用できない。大学はどう動いているか、どう考えているかを部局職員に直接伝えてもらった方がインパクトが強い。だから教職協働のようなものを入れようとなりました。

ただ部局が伝えたいこととセンターが伝えてほしいことはズレていたりする。学生部の一部の職員にとってはドラッグなどが大きな 이슈。それはわかるんだけど、初年次教育として学生に最初に言うべきことかといえば違うんじゃないか。もっとポジティブな、一般の学生に役立つ中身にしてもらえませんか？と最初はすごく喧嘩しました。

■ 学習支援センターの今後

安田 学習支援センターがコーディネートを担当してきた修大基礎講座がなくなってしまうんですよ。教職協働でやる授業がなくなります。

亀崎 色んなやり方があると思うけど、学部学科に対して、

大学運営委員会のようなところで「今年はこのことをやりたい」と伝えてお墨付きも得ながら、学部学科の初年次教育を改善していく協力関係を構築しませんかというのはいり得るんじゃないかと思う。どこかで成功事例を作れば、他もやってみたい。それは結構難しく私はできなかったけど。

修大基礎講座という全学的な仕組みはなくなるけど、学部学科の初年次教育の中で例えば図書館の利用の仕方とか、そういうふうなものは提供できるんですか？

松川 はい。しかし現在の修大基礎講座もそうですけど、教職協働として部局担当回と学部教員担当回はあるが、それが有機的につながっているとは言えない。

亀崎 難しいのだと思います、そこは。今もピアはあるんですかね？

富永 国際コミュニティ学部が活用されているだけです。

亀崎 ピアも成績優秀者のような学生を組織できればね。

これは実現できなかったけど、成績優秀者を集めてラーニング・スキルの教え方の授業を受けてもらう。そうやって養成したピアが初年次教育に入れば学習支援が厚くなるかなという話はしたことがある。それはカリキュラムやいろんなものが関係するのでハードルが高すぎたかもしれない。

「何をやればいいか」を考えながら、いろいろ出てきたものを「何でもやろう」でやればいいんじゃないかとは思っている。そういう組織なんです、ここは。「これしかやっちゃダメ」ではなく、初年次教育に関わることは全部やっていると。

松川 創設時の話をうかがうとともに、今後の学習支援センターについてもたくさん宿題をいただいたと思います。本日は長時間にわたりありがとうございました。

* FYSⅡ：FYSⅠを踏まえ学部学科が担当した「初年次セミナー」の前身科目。FYSⅠは前期、FYSⅡは後期に開講。

修大基礎講座の変遷

2007年度のカリキュラム改正で、本学の教育の質を保証することを目的に「修道スタンダード科目」がスタートし、その中の一科目として「修大基礎講座」の前身である「ファーストイヤー・セミナーⅠ」が構成された。この科

目は、教職協働の取組みとして、各学部・学科の教員と学習支援センターを中心とした各部局の職員が連携して授業を作り上げていくという新しい試みであったが、新しい仕組みを作り上げるということが容易ではなかったのは、亀崎先生のインタビューからも伺い知ることができる。

年度	科目名	趣旨・ねらいほか	部局担当の構成（変更点など）
2007～ 2010年度	ファーストイヤー・セミナーⅠ（FYSⅠ）	初年次生が円滑に大学教育や大学生生活に移行するための初年次教育の1つ。初年次生を高校生から大学生に早期に移行させるために、大学生らしい態度や学びへの姿勢・スキルを養成することを主眼とした。	学習支援センター、学生センター、キャリアセンター、図書館
2011～ 2013年度	修大基礎講座	2011カリキュラムとして修大基礎講座が全学的にスタート。FYSⅠを引き継いだ、修道スタンダード科目の中心的科目。	学習支援センター、学生センター、キャリアセンター、図書館、総合企画課、教学センター
2014～ 2016年度		修大そのものを理解し、修大で学ぶ意味を考えると、新入生に必要な大学における学習スキルを習得させることをねらいとした。	学習支援センター、学生センター、キャリアセンター、図書館、総合企画課、教学センター、ひろしま未来協創センター
2017～ 2021年度		2017カリキュラムが全学的にスタート。 4学期制が可能となり、修大基礎講座に導入する学部もあり。	学習支援センター、学生センター、キャリアセンター、図書館、総合企画課、ひろしま未来協創センター ※教学センター担当だった回を学習支援センターが担う
2022～ 2023年度		修大基礎講座の趣旨・ねらいは前カリキュラムを踏襲。	学習支援センター、学生センター、図書館、総合企画課、ひろしま未来協創センター ※キャリアセンター担当だった回を学習支援センターが担う

構成：教員担当 8～9回 部局担当 6～7回

関係教職員の声

これから何をするのか

国際コミュニティ学部教授 矢田部 順二



2024年度カリキュラム改正にともない、「修大基礎講座」が廃止される。2007年度に始まった「ファーストイヤー・セミナーⅠ/Ⅱ（FYSⅠ/Ⅱ）」から数えれば、17年も同じ科目が存続してきたことになる。近年は前例踏襲が続き、入学者の変化に対応し切れていなかったから、ようやく変わるか、との感慨を抱く。

私が学習支援センターの仕事に関わったのは2007年度からで、初めは次長として、2009年度から2011年度はセンター長として、草創期のセンターが学内に認知されるよう努めた。亀崎初代センター長と松川センター長との対談にもあ

るように、2011年度からFYSⅠを「修大基礎講座」という名称に変えた。これは2007年度カリキュラムが完成年度を迎えたため、実際には連携していないFYSⅠ/Ⅱの実態に即した名称を考案したもので、教職協働の授業スタイルはそのまま踏襲した。

実際、この仕事に関わった5年間は、文科省の高等教育行政の変化を背景に、教育手法や大学改革に関する各種の学会や研究会に多く出かけた。自分の研究分野とは別の勉強を重ねたが、授業スキルを磨く上では役立った。

私が所属する学部の2024年度カリキュラムでは、修大基礎講座が担っていたスタディスキルの部分を、学部主専攻科目の中に取り入れる。新学習指導要領も今の高校生に大学での学びのスキルは教えておらず、初年次教育は依然として必要だからである。学習支援センターはこれを今後どのようにサポートするのか。次のステージへの展望が求められていると思う。

大学職員から見た「修大基礎講座」

情報センター 浅野 健



広島修道大学では2007年度に「修道スタンダード」が導入され、「初年次教育」に取り組むこととなった。学習支援センターでは、「修大基礎講座」のコーディネートや日常の個別学習相談等、学生に寄り添った「学び」の場を提供することで、その検証と改善を繰り返し、よりよい「初年次教育」の定着を図ってきた。

今では、学外の会合、学会・研究会や他大学の発表においても、大学職員が講義を担当し学生の育成の一端を担うことは珍しくないが、当初は、授業科目を職員が担当し講義することについては、多くの意見（反対意見も含めて）があった。

実際、本学は、他大学に先駆けて「初年次教育」として

の「修大基礎講座」を大学職員の立場で企画・運営し、学生に講義するというエポックメイキングを成し得たことから、大きな前進を果たしており、また、大学職員のSDという観点から、この「修大基礎講座」の運営はSD研修の一助として機能してきたともいえるのではないかと考える。これからの大学職員には、大学運営に参画できる能力の育成（企画力やコミュニケーション能力等）が必要とされているが、この「修大基礎講座」を担当し、成績評価を担当する教員と授業の構成・構築から指導等までを相談・実践することで、上記に記載した能力の獲得に繋がったのではないかと強く感じている。実際、教壇に立ち学生の表情を見ながら授業を行うことは、SDとしての実践力を高めるのに非常に有意義であったといえる。

このように、SDとして自己鍛錬と研鑽を積む機会としても有意義な「修大基礎講座」は、大学職員として関わることができて本当にありがたいものであった。

ファーストイヤー・セミナー(FYS)Ⅰ、修大基礎講座を振り返る

教学センター 津原 有美子



私は図書館、キャリアセンター、学習支援センターを通じて16年間FYSⅠ・修大基礎講座を担当した。中でも印象深いのは図書館だ。科目を立ち上げる段階から参加し、職員の授業で何が伝えられるか、授業とガイダンスの違いは何か等、それまでにはない新たな視点を求められ、戸惑った事が思い出される。練りに練って恐ろしく大がかりな授業が完成したが、それは前期だけで授業回数約60回、知識や経験よりむしろやる気や体力が求められるモンスター的な授業だった。更に、授業の半分を占めた館内ツアー先導役の学生アルバイトの採用、育成、学生が達成感を得られるような見せ場づくりも我々の重要な仕事だった。

図書館全体を総動員したこの授業は毎年学生から高評価を得られたが、単純な内容に終始していないかと問い直し、

毎年マイナーチェンジを繰り返した。

そういう空気の中で、協働してくれた学生の活動は図書館ピアに発展し、館内ツアーはオリジナル動画になってWebサイトに残った。また当時、学内で紹介されたばかりのMoodleを課題の為に導入したり、書誌が載っていただけの味気ない『QUEST』をフルカラーの教材に作り変えるなど、この授業の存在が当時の図書館に劇的な変化や改善をもたらしたことを、最後に此处に留めておきたい。

私はその後、キャリアセンターでPROGを使用して他者（他社）とも協働し、学習支援センターでは授業を実施する側に立って、授業をまとめ、進めることも経験した。一つの授業を核として長年様々な角度からアプローチできたことは、職員として得難い経験となった。

修大基礎講座は役割を終えるが、私はこの授業で多くの教職員の皆様と関わらせていただき、様々な学びや気づきを得た。多忙な時期に共に取り組んでくださった皆様に、ここで感謝の意を少しでもお伝えできれば幸いである。

最後に…

これまで運営・実施に真摯に取り組んでこられたコーディネータ及び授業担当教員の皆様、職員の皆様に敬意を表します。

学生による学生のための 数学ピア！

学習支援センター 安田 幸子

学生からの「数学を教えてほしい」という依頼が毎年のように学習支援センターにありながらも、数学担当の学習アドバイザーがいなかったため対応できずにいましたが、今年度、経済科学部の先生方のご協力を得ながら、先輩学生が数学の学習相談に応じる学習ピアサポートとして「数学ピア」を立ち上げ、5月から活動を始めています。

何人の学生がどのような内容の相談に訪れるか、期待と不安が入り混じってのスタートでしたが、前期末試験が近づく頃から多くの学生が集まるようになり、学生同士の学

び合いも自然発生的に行われていました。

「まずは始めてみよう！」の精神でスタートしましたので、活動が始まってからの気づきや改善点は様々ありました。その経験をふまえ、より多くの学生をサポートできるように修正を加えながら現在も活動中です。

先輩ピアの経験を後輩ピアに引き継ぎながら、長く続く活動となることを大いに期待しています。

今年度前期の、支援する側と受ける側、それぞれの学生の声をここでご紹介します。

サポートしました



自身の課題と成長を感じたピア活動

経済科学研究科現代経済システム専攻
博士前期課程1年 田村 太一

私は6月から数学ピアとして活動しています。数学ピアの活動では主にミクロ経済学とマクロ経済学の質問について質問者と一緒に問題を解決できるように取り組んできました。活動を始めた頃は、ミクロ経済学全般について等の大まかな質問がありました。そこで、授業で扱っている参考書やプリントなどを一緒に確認し、質問者がどの部分が分からないのかを探り、課題を明らかにしていきました。時間をかけて一緒に問題を解くことで課題を解決に導くことができたので良かったと考えています。

また、私自身も質問者と一緒に問題を解く中で解き方を忘れている部分や分からないところが出てきたので、学生に教えることで自身の課題に気づくことができました。そして、相手に説明できるように問題を解くことを心がけるようになり、途中式の導出や公式なども丁寧に確認し知識の定着が良くなりました。数学ピアの活動を通して自身も成長することができたことは良かったと感じています。

サポートしました



相談者の目線に立つ

経済科学部現代経済学科4年
伊達 啓太

数学ピアでは、ミクロ経済学や統計学の授業で扱う数学についてのサポートをします。私の担当日は一度に多くの相談者が訪れるため、ホワイトボードを活用して相談者たちと一緒に課題を解くやり方にしました。

その際に私は2点意識しました。一つ目は「私が相談者側だったらどのように解説してもらったら理解しやすいのか」です。私は相談者が理解しやすいように一つ一つの途中式や途中式の補足を書き表し、問題を解く際に私自身の

考えを見える形にしました。2つ目は「相談者の分からない部分を放置しない」です。分からない部分を放置したまま解説を続けてしまうと、相談者は置いてけぼりになり、解説を最後まで理解することができません。そのため、私は解説中に何度も理解度を確認することにより、分からない部分を放置しないようにしました。

この数学ピアは支援する側も相談者と同じ学生であるため、相談者と同じ目線で問題に取り組むことができます。

サポートを受けました

数学学習相談を経て

経済科学部経済情報学科2年
今井 孔稀

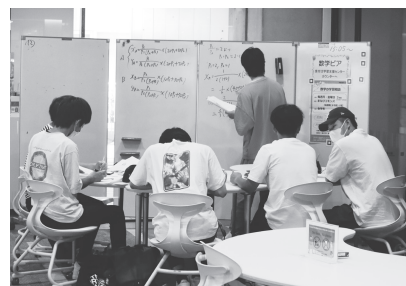
私は数学がとても苦手で、授業を聞いただけでは理解できないことが多くあり、かなり悩んでいました。しかし、数学学習相談を活用したことで、その状況が大きく改善されました。

学習相談は、基本はマンツーマン形式であるため、分からない箇所をすぐに質問できます。私はこれにより、自分が理解できていない部分を集中的に学習することができました。また、課題の解き方なども教えていただけたので、課題を提出しないことがなくなりました。

さらに良い点が、教えてくれる方が、大学院に通っている同世代ということで、気軽に質問することができるところです。

私はこれを週1回、4限が空いている日に通っていました。それまでは、3限が終わり次第家に帰り、ただただ過ごすことが多かったのですが、学習相談の時間に充てることで、有意義な時間へと昇華することができました。

授業についていけず困っている人、勉強する習慣があまりない人などは、ぜひ利用してみてください。



第76回

LSC ドキュメンタリー・アワー開催報告

『ハムレット』はなぜ名作か ―シェイクスピアの魅力に迫る―

商学部准教授 馬場崎 賢太

LSC ドキュメンタリー・アワーを担当するにあたり、「『ハムレット』はなぜ名作か」というタイトルを付けました。我ながら挑戦的なタイトルを付けたものです。本来、文学は読み手のものであるべきです。読者が、作品の言葉や行間から何らかを汲み出し、自らの心の中に素晴らしい物語を生み出せるならばそれは名作です。シェイクスピアの『ハムレット』が「名作」として400年以上もの間語り続けられているのもそのような読者や観客がいたからに他なりません。

しかしながら、この作品を理解することは容易ではありません。ともすると現代の私たちは『ハムレット』を初めて読んだ際「なぜこれが名作？」と首を傾げてしまいます。それは、この作品が、生きるとはどういうことか、人間とは何なのかといった、きわめて哲学的な問いを孕んでいるからだと言えます。今回は、参加者の「なぜこれが名作？」という気持ちを「これは名作だ！」という気持ちに変化させたいという大志を抱いて内容を考えました。

今回視聴したドキュメンタリーは、ハムレットを舞台で演じた経験をもつ俳優が案内役となって作品をどう解釈す

べきか考えるものでした。実際の舞台上の演技や映画のシーンも含まれていて、これまでシェイクスピアの作品に触れたことがない人でも楽しめる内容でした。ドキュメンタリーの視聴の合間に『ハムレット』のあらすじと有名な台詞を紹介し、それらの解釈の可能性について解説を行いました。また、この作品を正しく理解するためにルネサンス期のイギリスの世界観や価値観、宗教観についても説明しました。時間の都合上、私自身が面白いと感じている点に絞って解説しましたが、参加者アンケートから、参加された皆さんはそれぞれの立場でこの時間を楽しんでもらえたことを知り、嬉しく思っています。

「文学は役に立つのか」という議論をしばしば見かけますが、「役に立つかどうか」よりも「役に立てるにはどうしたらいいか」を考える方が有益です。特に現代は不安を抱えながらどのように生きていけばよいのかと悩んでいる人も多いかもしれません。ハムレットの悩みと葛藤は現代人に共通する部分も多くあるように思います。『ハムレット』を知り、何かひとつでも今後の人生のヒントが得られたなら素晴らしいことです。

大学教育学会 第45回大会参加報告

学習支援センター 安田 幸子

6月3日(土)・4日(日)、大阪大学吹田キャンパスを会場に、統一テーマを「ポストコロナ時代の高大接続」と掲げて開催された大学教育学会に参加した。大会案内の巻頭言には「コロナ禍、受験制度改革、学習指導要領の改訂がもたらした変化が、高大接続をどのようにアップデートしていくのか、大学教育のイノベーションにどのようなインパクトを持つのかを考える場に」とある。入学準備学習プログラムを担当している学習支援センターとしては重要なテーマであり、ちょうど過渡期といってもよい本学の高大接続について、他大学の実践例から学ぶ貴重な機会となった。

私が参加した「高大接続における学生の移行の多様性」がテーマのラウンドテーブルでは、「高大接続のセグメント化」という言葉がキーワードとなっていた。「セグメント化」とは、教育内容・選抜方法・学習者の社会的属性などによって高校から大学への学習者の移行パターンが細かく断片化し、多様な高大接続が並存するようになった状況、と定義されている。松下佳代先生(京都大学大学院教授)は、高校と大学は元来異質な教育段階だが、大学では初年次教育など高校までの学習を意識し、高校では大学のようなゼ

ミ的な授業を取り入れる、「大学の高校化・高校の大学化」といえる現象が現われているとの報告をされた。

「高校の大学化」に大きく関わる授業として2022年度から始まった「総合的な探求の時間」がある。最近よく目にする「探求学習」について、恥ずかしながら私自身はほぼ知識がなかったが、今回の学会で何度も見聞きし、ある発表者は現在のトピックとなっていると発言されるなど、探求学習が大学入学後の学習に大きく関わることをはっきりと認識できた。高大連携や入学前学習とうたいながら大学に入る前段階の学習について知らなければ、効果的な学習に繋げることはできないことを痛感した。

一方で、手厚い入学前教育は自立した学習に繋がらないかもしれないというジレンマを抱えているとの報告には大きく頷きたくなった。どこまでのサポートが学生の学びと成長に有益なのかは本当に難題だが、諦めず考え続けていくしかないのだろう。

他にも各大学の最新の活動を伺うことができ、私にとって難しい内容ではあったが、様々な刺激をいただいた学会参加であった。

新任学習アドバイザー 挨拶

学習アドバイザー 村田 翔



2023年4月からこの学習支援センターに学習アドバイザーとして着任いたしました。これまでは、大学院で学校における防災教育に関する研究を進めてきました。その後、中学校・高等学校の教諭として勤務し、主に中学社会・高校地理を

専門として、教科指導や生徒対応に取り組んできました。大学生への学習支援について経験したことはありませんが、これまでの実践等を踏まえながら、大学生の学習支援に取り組んでまいります。

先述した通り、学校現場に身を置いていましたので、学校現場の変化を顕著に感じてきました。昨今の報道においても、学校を取り巻く環境の変化が多様な観点から注目されていますが、決して中学・高校だけでなく、大学も変わらなければならない時期に来ています。同時に、大学生も変わっていく必要があると思います。4年間を通して、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「協創力」を身に付

け、学生一人ひとりが「地球的視野を持って、地域社会の発展に貢献できる人材」となるためには、まずは大学生として身に付けなければならない基礎的な能力を習得することが求められます。そのうえで、現在の社会情勢に強く関心をもち、絶えず学び続け、自ら成長していかなければなりません。急速に変化する現代社会で活躍するためには、様々な経験を通して、自分の考えをしっかりと持つことができる人材となる必要があります。

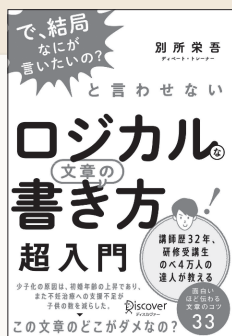
私たち学習支援センターでは、レポートの書き方や英語学習など、様々な学習相談を受けています。また、ワークショップなどを開催し、学びに対する支援を行っています。私自身も業務を通して、時間管理などこれまでの日々の過ごし方を振り返り、学生へ何か還元できることはないかと考えています。さらに、多くの参考資料に触れたり、学生支援に関する学会等に参加したりするなど、多くの知見を得て、修大生へより良い支援が提供できるよう自己研鑽に努めてまいります。



LSC 資料紹介

「で、結局なにが言いたいのか？」と言わせない ロジカルな文章の書き方超入門

別所栄吾著／ディスカヴァー・トゥエンティワン



学習相談の1つに、レポートの文章構成に関する相談があります。その学生の文章をみたとき、文章を読んだだけでは意図が伝わらないことがよくあります。それらに共通するのが「ロジカルな文章」、

つまり論理的な文章で書かれていない点です。

読み手に対して、論理的な文章にするためにどう改善したらいいのか、相手に意見が伝わる文章をどのように書いたらいいのか、そのような初学者に対して、本書は適しています。著者である別所栄吾氏は、民間企業などの研修の講師として、ロジカルシンキングなど研修を実施してきた人物です。研修において様々な文章に触れてきた著者が、論理的かつ分かりやすい文章を書くポイントをまとめたのが本書です。著者は「文章力の欠如は、見方を変えれば、事務ワークの生産性の向上の余地である (P.16)」と述べており、論理的な文章を書くことは、大学で

の学びを深めるだけではなく、一生役立つ能力であるといえます。その能力を身に付けるためにも、本書の価値があります。

本書の特徴として、①文章を書く上での注意すべき点を端的な言葉で表している。②悪い文章と良い文章両方を提示し、改善する部分を示している、この2点であります。①について、論理的な文章にするためのポイントを最初に短文で書かれており、読者は素早く内容を理解することができます。②については、各トピックに悪い文章例があり、それをどう修正していくか、良い文章例を用いて説明されていて、理解しやすくなっています。

本書の構成として Part 1 では悪い文章と良い文章を読み比べ、Part 2 で書く前の発想・着想、Part 3 で実際に執筆する際のルールについて説明されています。そして、Part 4 では総合演習と題して、実践演習を行うことができます。そのため、本書は、論理的な文章を書くうえで、実践的に学ぶことができる一冊となっています。

<学び★サブリ>

2023 Vol. 24

効果的な単語学習

学習アドバイザー 谷岡 亮

外国語を学習する際の重要な要素の一つに単語学習があげられます。英語のみならず、新しいことを覚え記憶に定着させることはなかなか難しいことです。有名な「エビングハウスの忘却曲線」によれば、記憶力に自信がある人でも、はじめて勉強した内容の半分以上はおおよそ1時間後に忘れてしまい、1日後になると6-7割のことを忘れてしまうと言われています。つまり、覚え方を工夫し忘れないように覚えていくことが大事です。

記憶を定着させるには定期的な復習が欠かせませんが、まず第1に大事なのが学習スケジュールを考えることです。学習スケジュールは Massed learning と呼ばれる「集中学習」と Spaced learning と呼ばれる「分散学習」に分けられます。「集中学習」とは学習や暗記など間隔をおかず集中的に行うことで、一方の「分散学習」は学習や暗記を間隔をあけて複数回行うことです。長期的な記憶保持を目的とする場合は「分散学習」を行うことが良いとされています。例えば TOEIC などを勉強する際、1週間に100個英単語を覚えると決めたとします。その場合、1週間に1度、1日に2時間かけて英単語を100個覚えるよりも、1週間に4日間、1日30分ずつ覚えた

方がより確実に長期的な記憶を可能にします。

続いて紹介したいのが「テスト効果」というものです。近年の研究ではテストをすることに学習効果があるとされており、効果的な学習方法の一つとされています。ただ英単語をみたり、書いたりしながら覚えようとするのに加えて、赤いシートを使ったり、単語のスペル、意味どちらかが見えないようにページを折るなど、テストの要素を加えることで記憶の定着をより促すというものです。中学校や高校のテストで友達に問題を出してもらって答えているとなんかよく覚えられたなんていう経験はまさにここからきているのです。

単語学習は方法を工夫、改善することで効率を上げることが可能です。その他にも、英語の単語学習では文脈と合わせて覚えたり、語源を覚えるなど様々な工夫が存在します。自分に合った単語学習を取り入れてみるとより語学学習が楽しくなり、結果に結びついていきます。

参考：中田達也（2019）『英単語学習の科学』研究社

<学び★サブリ>はまなびコモンズ掲示板でも読むことができます。

退職のご挨拶

学習アドバイザー 斎藤 佳子

2021年4月より、学習支援センターでお世話になりました。2021年はコロナ禍の真只中にあり、学内はひっそりとしていましたが、2023年には対面対応となり、学内に活気が戻りました。着任してからというもの、毎年コロナ対応などの事情が変わり、前年通りにはいかないことばかりの中で業務にあたってきたような気がします。そのような中で、先生方、職員や学習アドバイザーの皆様には、多くのことを教えていただきました。心より感謝申し上げます。

ワークショップやスタディグループ、修大基礎講座など、多岐にわたる業務の中で特に印象深いのは、学生と一対一で接する学習相談です。学習相談中、なにか合点がいったようにぱっと学生の顔が明るくなる瞬間は、私にとって大きな喜びでした。

しかし、実際は、うまく説明できない苦しさや苛立ちのようなものを浮かべて考え込む学生の顔に出くわすことの方が多かったように思います。そのような時の学生の表情は、時折、子どものころの自分を思い起こさせました。勉強などでなかなかわからない問題があると、親が解き方を

教えてくれましたが、私はその解き方を受け入れようとはしませんでした。そして、苛々としながらいつまでも間違った解き方を変えようとせずにいたのです。

思えば、良い方法を教えてくれる人がいるのに、なぜ私は耳をかさず、間違った解き方に固執したのでしょうか。それは、時として、何ができないより、変わって成長することのほうが苦痛だからかもしれません。自分は今のままで間違っていないのだと認めてもらいたいだけで、新しい方法を身に着けたいわけではなかったのです。変わらずにいたかったのです。変わることは、自分は間違っていたと認めることです。

「この世の苦しみを知ったところから真の人生は始まるのです」と、作家、車谷長吉は言いました。学問も同じではないでしょうか。はじめから上手にできない自分、がんばってもできない自分を苦しみながら受け入れたとき、本当の意味での学びがはじまります。

学生の身分をとうに終えた今も、学ぶことはつきません。この度、広島修道大学を離れることとなりましたが、共に、学ぶ苦しさをしなやかに受け止め、自らの追い風にしていけることを願っています。

参考：車谷長吉（2012）『車谷長吉の人生相談 人生の救い』朝日文庫

